



| | |
|--------------|---|
| Title | 内田憲男 履歴 |
| Author(s) | |
| Citation | 大阪外国語大学英米研究. 2004, 28, p. 3-6 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/99274 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

内田憲男（1947－2002年） 履歴



<学歴>

- | | | |
|-------|----|---------------------|
| 昭和45年 | 3月 | 大阪外国語大学英語学科卒業、文学士修得 |
| 46 | 4 | 京都大学大学院英文科修士課程入学 |
| 48 | 3 | 同課程終了、同大学修士修得 |
| 49 | 1 | 英国キール大学英文科修士課程入学 |
| | 9 | 同課程中途退学 |

<職歴>

- | | | |
|-------|----|--|
| 昭和45年 | 3 | 大阪万国博覧会住友館嘱託（VIP通訳）に採用される |
| | 9 | 同勤務終了、退職 |
| 49 | 10 | 京都大学文学部英文科助手に採用される |
| 51 | 4 | 同助手から大阪外国語大学外国語学部英語学科助手に転任 |
| 53 | 1 | 講師に昇任 |
| 58 | 10 | 助教授に昇任 |
| 平成 | 5 | 1 教授に昇任。この間、平成5年3月25日より10ヵ月間、文部省在外研究員として、英国ケンブリッジ大学へ留学（英文科客員研究者） |

＜学会及び社会における活動等＞

| | | |
|------|----|-------------------|
| 昭和46 | 4 | 京大英文学会加入 |
| 51 | 5 | 日本英文学会加入 |
| 55 | 5 | 日本ロレンス協会加入 |
| 58 | 10 | D. H. ロレンス研究会加入 |
| 平成6 | 10 | 日本ロレンス協会評議員に選出される |
| 9 | 6 | 日本ロレンス協会編集委員担当になる |

＜研究業績＞

(著書)

- 1 『『アロンの杖』の特質——小説と思想の葛藤——』
(『ロレンス研究——「アロンの杖」——』、共著
1988年11月、朝日出版社)
- 2 「ロレンスにおけるモダニズム——レールケ、パーキン、ロレンス」
(『D. H. ロレンスと現代』、共著、
1995年11月、国書刊行会)
- 3 「『チャタレー小説』におけるイングランド社会——『ファースト・レディ・チャタレー』の面白さ(『ロレンス研究——「チャタレー卿夫人の恋人」——』、共著、1998年2月、朝日出版社)
- 4 「D. H. ロレンスとヴィクトリア時代——＜家庭の天使＞と＜新しい女＞——」
(『ヴィクトリア朝——文学・文化・歴史——』、共著、1999年11月、
松村昌家教授古希記念論文集刊行会、英宝社)

(学術論文)

- 1 'Exeunt through the World of Dissolution: A Study of *Women in Love*' (卒業論文)1970年3月、大阪外国語大学。
- 2 'A Quest for Identity: A Reading of *Sons and Lovers*' (修士論文)1973年3月、京都大学
- 3 「*St. Mawr* の主題の曖昧さについての一考察」、1997年2月28日、『大阪外大英米研究』第10号
- 4 '*The Lost Girl*'
1997年3月15日、『大阪外国語大学学報』第39号。
- 5 「*The Plumed Serpent*——ヒロイン Kate のアムビヴァレンスを軸にして」1979年3月30日、『大阪外大英米研究』第11号

- 6 「*The White Peacock* —— 語り手 Cyril の曖昧な立場について」
1980年3月30日、『大阪外大英米研究』第12号
- 7 「*The Trespasser* —— 愛の不可能性」
1983年3月30日、『大阪外大英米研究』第13号
- 8 「『プロシヤ士官』(『*The Prussian Officer*』) —— 死の通過儀礼」
1985年3月30日、『大阪外大英米研究』第14号
- 9 「『天使も踏むを恐れるところ』(*Where Angels Fear to Tread*) —— 生の傍観者フィリップ・ヘリトンの成長のかたち」
1987年2月28日、『大阪外大英米研究』第15号
- 10 「『ハワーズ・エンド』—— E.M.フォースターとエドワード朝社会」1993年3月、『英語圏世界の総合的研究』(大阪外国語大学)
- 11 「文学理論とD.H.ロレンス」
1997年3月、『イギリス研究の動向と課題』(大阪外国語大学)
- 12 「イングランドを文学的な視点で研究する立場から—— R.ブルックとD.H.ロレンスについての一考察——」1997年『世界地域学への招待』(大阪外国語大学)
- 13 「*A Reading of The First Lady Chatterley : a picture of class society in England*」, 1998年2月, *The D.H. Lawrence Studies - Lady Chatterley's Lover Number - Synopses -*, D.H.ロレンス研究会, 朝日出版社
- 14 「性差の揺らぎ—— ロレンスの『狐』を読む——」1999年3月、『大阪外大英米研究』第23号

(研究エッセイ)

「E. M. フォースターとD. H. ロレンス:『モーリス』……階級社会の桎梏、『息子と恋人』……父親の生命的価値、『ハワーズ・エンド』……ただ結びつけさえすれば……、『恋する女たち』……破壊と創造、『インドへの道』……魂の架橋」1988年10月、11月、12月、1989年1月、3月、啓林館『啓林』、Nos. 53、54、55、56、57.

(翻訳)

- 1 「現代イギリス詩小史」、A Banerjee 編著、*Modern English Poetry: A Selection* 所収、開文社出版、1982年3月
- 2 「民衆教育」(第7-12章)、『不死鳥・下』所収、山口書店、1986年12月
- 3 「『恋する女たち』のプロローグ、『恋する女たち』へのはしがき、「所有について」、「一家の長」、「母権制について」、『不死鳥Ⅱ』所収、山口書店、1992年4月
- 4 『大英帝国の三文作家たち』(序章-第4章、および索引)、研究者出版、1992年6月
- 5 「『恋する女たち』における無の力」、『ポスト・モダンのD.H.ロレンス』所収。松柏

社、1997年2月

(書評)

- 1 「C.L.Ross, *Women in Love: A Novel of Mythic Realism*」、『D.H.ロレンス研究』第2号所収、日本ロレンス協会、1992年。
- 2 「芸術批評家 D. H. ロレンス、Anne Fernihough: *D. H. Lawrence: Aesthetics and Ideology*」、『英語青年』Vol. CXL No.3 所収、研究者出版、1994年
- 3 「＜文学＞から＜文学的なもの＞へ、Peter Widdowson, *Literature* (London and New York: Routledge, 1999)」, 大阪外国語大学言語社会学会誌『EX--ORIENTE』Vol. 6、2002年

(大学テキスト)

David Lodge: *The Art of Fiction*, 『小説の技法』、渡辺克昭氏と共編註、英宝社、1996年